



発行者 島根県健康福祉部
医療政策課医師確保対策室

今回の紙面

- ◆ 地域医療最前線 NO.83 「人口減少高齢化多死社会の下での医療提供体制の構築」
《医療政策課長 内部 宏》
- ◆ 研修医のページ NO.60 「地域で活躍できる総合診療医を目指して」《大田市立病院 研修医 島田 直英》
- ◆ 看護師さんのページ NO.61 「地域での看護実践にも対応できる能力育成を目指した新たな看護基礎教育」
《島根県立石見高等看護学院 副学院長 吉田 真奈美》
- ◆ 赤ひげ先生 「地域医療への道のり～その2」《公立邑智病院 整形外科 保坂 聖一》
- ◆ 事務長さんのページ 「奥出雲病院に「蝶が舞う」春が来た！」《町立奥出雲病院 事務長 中西 修一》
- ◆ 編集後記



地域医療

最前線

No.83

人口減少高齢化多死社会の下での医療提供体制の構築

医療政策課長 内部 宏



情報誌

「島根の地域医療」を御愛読の皆様には、日頃から様々な立場で本県の医療を支えて頂いており、加えて長引くコロナ禍の様々な「疲弊」の中にあっても、県民にとって欠かすことの出来ない医療の提供に御尽力頂いておりますことに對し、改めて厚くお礼を申し上げます。

御承知の方も多いかとは思いますが、令和5年度は6年に1度の島根県保健医療計画と島根県介護保険事業支援計画の同時改定作業を進める年に当たります。県全体では、医療審議会、地域医療支援会議を開催し、各圏域でも協議の場を設けるなどにより、検討を進めて参ります。委員の皆様はじめ医療、介護、市町村等の関係者の皆様、大変お忙しい中とは存じま

すが、御協力を何卒よろしくお願いたします。

また、令和6年4月からは医師の働き方改革がスタートし、診療報酬改定も予定されているなど、医療機関におかれては、様々な変化への対応が求められることになると考えております。

さて、島根県の実情を考えて見ますと、全国に先駆けて人口減少高齢化多死社会に突入しており、特に、中山間・離島地域において顕著となっていることは皆様も実感されていることと存じます。医療資源に決して恵まれていないとは言えない本県において、医師、看護師等の医療従事者の確保だけでなく、医療を支える様々な担い手も不足し、患者も減っていく中で、どのように医療提供体制を確保していくのか、7つの医療圏に拠点となる病院を確保し現状の機能を維持し続けていくことは、決して容易ではありません。

一方で、石見や隠岐にお住まいの方々に「医療を受けたければ松江出雲や県外に行けば良い」ということにはなりません。身近な地域で何をどこまで出来るのか、医療関係者はもとより、地域住民の理解や地元市町村の協力も必要不可欠です。

「ドクターヘリ」や「まめネット」の本格稼働から10年が経ち、改善や新たなツールの導入も検討して

いく必要があります。また、地域医療を確保するためには、医療従事者がより働きやすい環境を整える対策も進めていかなければなりません。さらには、住民がサービスを受けるための生活の場の確保なども、本気で考えていかなければ、島根の地域医療を守っていくことは困難と考えております。

医学や、情報通信・ハイテクノロジー技術などの進歩にも期待し動向を注視しながら、県として効果的な対策に取り組み、県民の生活を支えていくために必要な地域医療を守っていきたくないと考えており、当方としても微力ながら汗をかいていきますので、この計画策定を機会に、様々な御提言、叱咤激励を頂戴出来れば幸いです。



研修医のページ

No.60

地域で活躍できる総合診療医を目指して

大田市立病院 研修医 島田 直英



大田市立病院の初期研修医2年目の島田直英と申します。

私は大阪府の出身ですが、気づけば人生の3分の1を島根で過ごし

ており、精神的には島根人のつもりでいます。それが影響したのか、いろんな方に「顔が島根っぽい」と言っていたら聞いておられます。どういふニュアンスかは分かりませんが、お褒めの言葉と受け取っています。

大田市立病院での初期研修1年目は主に内科系をローテーションし、2年目は外科系を中心としました。学生時代はオペ室に入るだけで顔が青ざめてブルブルと震えていた私が、小手術の執刀医をさせてもらえるまでに成長できたのはひとえに指導医の先生方の総合医育成に対する思いのおかげでした。指導医の先生方は、総合診療医ならこままでできた方がいい、こういう考え方をした方がいいと私に合わせた達成目標を設定してくださり、大田で研修して本当

よかったですと実感しています。

医師3年目からは島根大学総合医療学講座に入局し、総合診療医としての第一歩を踏み出そうとしています。島根大学病院・大田市立病院総合診療専門医コースに所属し、総合診療専門医としての専門研修に励むこととなります。大田市立病院／大田総合医育成センターでの勤務も含まれ、引き続き大田の地で働くことができ喜びを感じています。また、総合診療Iの研修では診療所や小病院での勤務を予定しております。

私は学生時代、島根大学の地域医療研究会というサークルに所属しておりました。開学より存在する歴史あるサークルでOB、OGの中には現在も島根県内の地域医療を支えている方が多くおられます。そういったご縁で低学年の頃からへき地診療所の見学や実習をさせていただきました。特に浜田市の弥栄診療所の阿部顕治先生には診療のご指導だけでなく、地域



でのまちづくり活動や保健活動についてもお誘いいただきました。弥栄診療所が地域での社会インフラとしての機能を果たすと同

時に、地域住民と双方向のコミュニケーションを取りながら機能向上を図っていく様子は地域での持続可能性を探る中でのモデルとなる存在に感じました。そして「地域医療は楽しいよ」と顔をほころばせておられた阿部先生のお姿は私のキャリアモデルとなっています。

研修医2年目には川本町の加藤病院で地域研修をさせていただきました。訪問診療に非常に力を入れておられ、更には数十人、数百人単位の集落での巡回診療、背景人口数百人の診療所の運営、そして背景人口千人規模の本院の運営と一人単位から千人単位までシームレスに診療を行っている様子が印象的でした。また複数の介護保険施設を運営されており、訪問診療を受けている患者さんが冬は雪に閉ざされる地域に住まわれていることから冬季のみ施設入所するなど柔軟に対応されていました。まさに地域包括ケアシステムが調和を取れて機能していることに、感銘を受けました。

こういった経験から島根県は地域医療の最先端を走っていると実感しています。近年はWEB会議が一般化し、県内の総合診療のネットワーク化が推進されています。県内のどこにいても教育熱心な先生方にご指導いただくことができる好環境の中で研鑽を積むことができ幸いです。「地域医療は楽しいよ」と破顔して笑えるように研鑽を積んでまいりたいと思います。

看護師さんのページ

No.61

地域での看護実践にも対応できる能力育成を目指した新たな看護基礎教育

島根県立石見高等看護学院

副学院長 吉田 真奈美

当学院開校は昭和54年4月。地元医師会や県西部市町村の度重なる県への要望が実った開校と聞いています。当時、県内の看護師充足率は東部99%、西部72%と圧倒的な格差を示していました。人材不足の中で県西部の地域医療をいかに支えていくかが喫緊の課題とされていたそうです。そのような経緯によって誕生した当学院は、当初から「地域医療」を担う看護師養成の役割を背負っていたと言えましょう。その成果の一つとして、卒業生の県内就業率の高さ(約9割)があります。おかげさまで実習病院にはたくさん卒業生が勤務しており心強いですし、実習指導や学内における講義等とおして後輩の育成に力を貸してもらっているものありがたい限りです。

さて開校45年目を迎える当学院では今年度、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正を反映して、カリキュラムを大幅に改正しました。この背景には「少子超高齢多死社会化」生産年齢人口の減少による「地域包括ケアシステムの促進・地域共生社会の実現」というニーズがあります。そこで、新カリキュラ

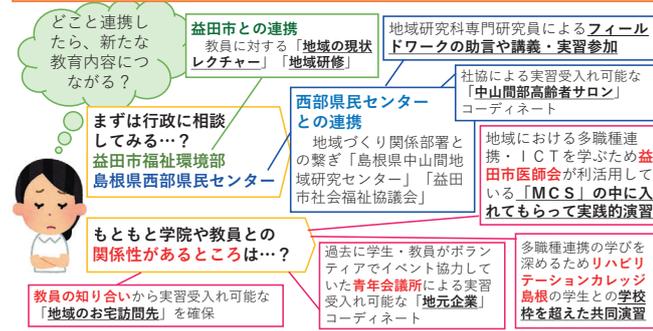
ムを構築する上で最も意識したこと
は、地域の人々の暮らしを理解し、
多様な場で健康をサポートする能力
を向上させるという点です。

しかし、これまでの「病院施設内
での看護中心」のカリキュラムから、
「地域での看護実践にも対応できる」
カリキュラムに変更するといつて
も、どこから取り組んだら良いのか
と悩みました。そんな時、島根県西
部県民センターのご協力を得て、益
田市社会福祉協議会と連携し、地域
の高齢者サロンでの実習を中心とし
た「地域を知る実習」が可能となっ
たことが大きな一歩となりました。

この実習では、益田青年会議所とも
連携し、働く方々の地域や健康への
思いと健康管理を学び、また一般家
庭を訪問して地域で暮らすことへの
思いを知
ることも
盛り込み
ました。

これによ
り、入学
早期の段
階で「地
域や家族
を見る能
力」を向
上させる
ことに繋
げたいと
考えたの
です。ま
た、これ
からの地

地域での看護実践に対応できる能力を育成するための看護基礎教育



域医療に必須なのはICTの活用と
多職種連携です。そのために、益田
市医師会が地域で活用されている
情報共有ツール「MCS」を使用し
て、より実践的な演習を取り入れま
した。さらにリハビリテーションカ
レッジ島根との合同演習により、学
生時から他の職種との連携を意識で
きる科目設定も行いました。加え
て、臨床判断能力を高めるための演
習を学年ごとの積み上げ式に再編成
するなど、これからの地域医療の環
境変化に対応できる看護師育成を目
指し、様々な工夫を盛り込んだカリ
キュラムを構築しました。

これら一連の作業を通して思うの
は、看護師養成を学校・病院という
枠の中だけで行う時代は終わつた
ということです。行政機関や地域の
方々との連携を深め、医療需要の質
の変化に対応できるよう看護基礎
教育を意識し、「地域に必要とされ
る学校」となることが重要だと考え
ます。

物語類型のひとつに「行きて帰り
し物語」があります。主人公はある
見知らぬ所に行き、その体験から成
長し、それを携えてまた帰ってきた
ま。このことは、看護基礎教育と
てもよく似ていると思います。学生
たちは学校から地域に出て人々と出
会い、病院や福祉施設等で様々な体
験をして成長し、また学校に戻って
学びを深めていきます。これを往還
的に繰り返すことで、この地域に居
なくては何ならぬ看護師に育つても
らいたいと願っています。

赤ひげ先生

地域医療への道のり、その2
公立邑智病院 整形外科
保坂 聖一

皆様こんにちは。再度機会を頂き
ましたので第2弾を書かせて頂きま
す。前回は40代おっさん整形外科医
が地域医療を目指し、島根県の赤ひ
げバンクや民間サイトで候補の病院
を探すお話でした。今回は転職に向
けて行った所属医局や家族との話し
合いについて書くかと思えます。

私は昨春まで関東地方の私大整形
外科医局に約20年間所属していまし
た。よく周りの人にいつ医局に辞め
ることを伝えたく聞かれますが、私
の場合、後任のことも考え、約1年
前に伝えました。大学医局に所属し
たことがある人は分かると思いますが
が、教授や医局スタッフと一緒に働
いたのは、入局後専修医の1年と大
学に戻って臨床と研究に追われた数
年間だけです。あとの大部分は関連
病院に出身していた訳ですから、私
が突然辞めますと言ったところで、
こいつ誰だっけ？という感じではな
いでしょうか。結局に際し医局とは
色々お話をしましたが、医局側では
個々の事情まで把握するのは難しい
のだなと感じました。ただ結局につ
いては個人の意志を尊重するとのこ
とで意外にスムーズに受入れられま
した。これは私が20年勤めたこと
医局員を多く抱える医局だったこと

が大きかったと思います。
結局に際し私から医局にお願いし
たのは、半年前倒しで後任Drを派遣
してもらおうことでした。退職までの
半年間は初診と手術は控えて再診の
みとし、後任Drに段階的に患者さん
や業務の引継ぎをさせてもらいまし
た。退職直前まで手術を行うのは望
ましくないので、後任と一緒に勤
務していれば引継ぎがスムーズに行
くからです。これは私の我儘でした
が、周囲の協力もあって認めて頂き、
余裕を持って後任への引継ぎや転職
の準備が出来ました。また、この半
年間は整形の業務とは別に、以前か
ら興味があった在宅診療や緩和ケア
にも従事させてもらいました。整形
兼務でこのようなことをやったDrは
いなかったため、事前に院長や部長
とも相談しましたが、快諾頂きました
。今後の地域医療に向けて有意義
な半年間を過ごすことが出来たと思
います。

家族に対しては、まず妻に医局を
辞めて地域医療をやりたいと思つて
いること、2人の子供が中学、高校
に通学中ですので、しばらくは単身
赴任するつもりであることを伝えま
した。当然最初は受入れられませ
んでした。妻や子供にとっては私がど
んな仕事をするかよりも普通に働い
て給料を稼いでくれることが大事で
す。なぜそうまでして地域医療をし
なければならぬか理解されませ
んでした。私は医師人生の後半は整形
が本場に必要とされている地域で働
きたいこと、今やらないと後悔する

のではないかと伝えました。妻は何となく悩んでいる私の様子を見ていて、最終的には、私が生き生きと働ける職場で働くのが一番いいよ、と言ってくれました。子供達は事の重大さを理解できていないようでしたが、がんばってきて！と言ってくれました。家族の理解がなければ私の試みは実現できなかった訳ですが、本当に家族には感謝しありません。さて、まだ公立邑智病院のことが書けていませんね。またの機会があれば書かせて頂きたいと思います。



写真；当院の骨粗鬆症リエゾンチーム
前列左側が筆者

事務長さんのページ

奥出雲病院に「蝶が舞う」 春が来た！

町立奥出雲病院 事務長 中西 修一
船通山の雪解け水を湛えて、清らかな斐伊川の流れが宍道湖へと向かい、春を告げる季節となりました。

当院は常勤医師5名の厳しい冬の時代を乗り越え、令和3年11月から病床数98床、介護医療院50床を合わせ持つ病院へ再編し、この春には常勤医師が9名となります。現在、急性期病棟51床と包括ケア病棟47床を有しています。包括ケア病棟は在宅復帰率が重要であり、退院後は自宅へ帰るか在宅施設としてカウントできる介護施設等への入所が必要となります。当院では自宅に帰られる方を支援し、また自宅へ帰ることが難しい方への対応として、介護医療院を有効に活用いただきながら運営を行っています。

簡単に在宅と言っても小さな町では民間サービスが十分ではなく、当院では令和3年7月より「在宅診療センター」を設置しました。このセンターの役割は、①主に総合診療科の医師が担う「訪問診療」、②看護師が行う「訪問看護ステーション」、③リハビリ職員が行う「訪問リハビリ」、④そして県内では珍しい管理栄養士による「訪問栄養指導」のサービスを行っています。ちょうど「蝶が舞う」ように4つ羽の異なるサービスをバランスよく有効に機能させ、在宅サービスを展開しています。今後はそれぞれの羽を大きくさせ、国蝶である「オオムラサキ」のように魅力ある活動を目指していきます。

さて、病院事業を進めていくには多くの人材が必要です。これまで医師や看護師の確保に重点を置いていましたが、奥出雲町の人口動態を見ると後期高齢者数は今後10年間大きな動きがない推計となっております。一方、労働

人口は2割近く減少すると見られ、今後当院で働く様々な職種の人材を確保することが難しくなると考えています。特に介護医療院の運営には介護福祉士をはじめとした介護職員が必要となります。当院ではこの問題解決のひとつとして、昨年から外国人就労者2名に介護補助者として勤務いただいています。日本語が上手で誰に対しても朗らかに笑顔で接することができ、仕事ぶりはまじめで、介護人材不足を十分補ってもらっています。この春には更に4名を増員する計画です。

話は変わって我が町、奥出雲町について触れたいと思います。私は奥出雲町のことを「島根アルプス」と言っています。標高が高く、県内最大の豪雪地帯であり、除雪作業は私をはじめ病院事務職員の大きな仕事のひとつですが、それだけではありません。奥出雲町は空気が澄んで星は美しく、「美肌の湯」の温泉があります。私も生産している「仁多米」や、昨年全国和牛オリーブピックで島根を代表して大健闘した「奥出雲和牛」、ワイン以上に口当たりがよいと好評の日本酒「玉鋼」、そして秋には国道が渋滞するくらい人が溢れる「そば」もあります。

それでも私の今年のお勧めは、もうすぐ幻となるトロッコ列車「奥出雲オロチ号」です。島根アルプスを縫うよう

に走る三段スイッチバックは、鉄道マニアでなくても一度は乗ってみたい貴重な体験を約束してくれ、コロナ禍の前までは研修医や実習生の皆様といっしょに乗車したことを思い出します。まだまだ書き切れませんが奥出雲町へ遊びに来てストレス解消をしてくださいます。お待ちしています。



編集後記

『島根の地域医療』第78号をご覧いただきありがとうございました。また、お忙しい中にもかかわらず執筆いただいた皆様、ありがとうございました。島根県HPでは、令和4年12月5日現在の医療機関の医師募集情報を掲載しています。詳しくは、

<https://www.pref.shimane.lg.jp/medical/kenko/iryu/ishikakuhotaisaku/isi-kyujin.html>

または、「島根の医師確保対策」で検索、ご覧ください。